

<タイトル>

「最後まで住み慣れたまちで暮らし続けるために」
～大牟田市地域医療・介護連携ビジョンの取り組みと市立病院の役割～

<本文>

かつて炭鉱で栄えた大牟田市は、石炭から石油へのエネルギー政策が転換されたことに伴い、人口は20万5700人（1960年）をピークとして、11万7200人（2017年4月）と約43%減少している。高齢化率35.1%、一般世帯数に占める65歳以上の単独世帯割合17.9%と福岡県内の他市と比較し3番目（全28市部）に高い水準である（2015年実績）。

また、大牟田市は医療機関数が多く病床過剰地域でもある（平成29年度第1回福岡県有明区域地域構想調整会議）。地域医療構想では、大牟田市のある有明保健医療圏において、2025年の必要病床数は3463床と2015年の4553床から1090床（23.9%）が過剰と推計されている。病床機能別では、回復期病床のみ若干不足していると指摘されている。

地域包括ケアシステムの構築が求められるなか、増えることが予測される在宅療養ニーズに対応するためには、住民参加のもとに、医療と介護を一体的に提供する体制を構築する必要がある。大牟田市は、平成29年3月に、在宅医療・介護連携に関連する団体（全10団体）と協力し「大牟田市地域医療・介護連携ビジョン」を策定した^{*1}。ビジョンでは「チーム大牟田！！」をキーワードに、行政や保健・医療・福祉団体それぞれの計画のなかに位置づけられ、一体的な取組として具体化・推進されている。

本シンポジウムでは、このような大牟田市の取り組みなかで、地域の中核的な急性期医療を担う大牟田市立病院の果たすべき役割やなどを紹介し、フロアの皆さんと一緒に、地域の特色を活かした医療と介護の連携について考えたいと思っている。

^{*1}<2025年の大牟田の状況を受けた『取り組みの方向性』>

- ①当事者の希望・状況にあわせた適切な在宅医療・介護の提供
- ②チームによる在宅医療・介護連携の実現
- ③介護予防・健康づくり・生活支援等による健康寿命の延伸
- ④在宅医療の負担を減らす基盤づくり



ビジョン検討ワーキングの様子